26PB-am227

東海地区 SP 養成者ネットワークの取組：薬学分野のシナリオを体験した模擬患者の意見から得られた課題

〇半谷 眞七子[1], 福井 愛子[1], 亀井 浩行[1], 阿部 恵子[2], 藤崎 和彦[3]（[1]名城大薬, [2]名古屋大医, [3]岐阜大医）

【目的】薬学教育では SP 参加型教育の需要が高まる中で、模擬患者（SP）のトレーニング方法・パフォーマンスの質など問われている。東海地区では、2013 年より SP 養成者が SP の演技及びフィードバックの質の向上と共有、及び SP 養成者の SP トレーニングの知識・スキルの標準化を目的に勉強会を企画している。今回は、第 3 回東海地区 SP 勉強会＆交流会「薬学生相手の模擬患者を演じてみよう」に参加した模擬患者へのアンケート結果から、今後の模擬患者養成の問題点を検討した。

【方法】参加者は東海地区 6 大学の SP 研究会に所属している模擬患者 59 名（医学部 32 名、歯学部 10 名、薬学部 17 名）で、薬学生と対応することを目的とした糖尿病患者のシナリオで役作り・演技の標準化を行い、薬学生との模擬面接を体験・観察した。

【結果】参加した全員の SP が、「シナリオ理解」「役作り」に役に立ったと感じており、肯定的な回答を得た。また、「シナリオを覚える教材が役に立った」「実学生とのロールプレイが役立った」等、体験型学習が SP の役作りに効果的であるという意見が多かった。今回は薬学生対象のシナリオは初めての SP が多く、「同じ副作用の尋ね方でも医学生と薬学生とでは観点が異なった」「薬局の役割を再認識した」等、学部の違いによる役作りの難しさを感じる意見も聞かれた。

【考察】他大学との SP の集合学習は、SP にとって自らの演技を振り返り、情報共有する機会となった。実際の学生が参加した体験学習は、求められている SP の役割が明確となった。また学部が異なる場合は、養成者も模擬患者に戸惑いがあること念頭に置いた SP 養成が必要であることが示唆された。